真宗寺院に伝来する親鸞の伝記資料

―下益城郡美里町恵照寺蔵『親鸞聖人御因縁』及び『御絵伝詳解』について―

湯谷祐三

一

平成十九年九月、熊本県立大学日本語日本文学研究室の調査活動への同行が許され、同県下益城郡美里町に所在する浄土真宗本願寺派恵照寺の蔵書を拝見する機会に恵まれた。同寺の蔵書は主に江戸期の仏書の版本を中心に形成されているが、江戸期の写本類も少なからずあるようで、本稿では写本の中で偶目した二点の典籍について簡単に報告したい。

一つは『親鸞聖人御因縁』と内題に記されるもので、写本一冊、縦二〇・三糎、横一五・八糎、料紙は厚手の楮紙で全十三丁、表紙は本文と共紙で外題は無い。現在はノドを糸で止めているが、本来の装丁は粘葉装である。本文は漢字片仮名まじりの大きめの字体で書写されており、各漢字にはすべて片仮名の振り仮名が施されている。奥書等は無いが、使用している片仮名の字体や料紙の調子等から判断して、江戸初期以前、室町後期の書写にかかる可能性があり、今回拝見することのできた典籍の中では最も書写年代が古いものと思われる。

内容は、その内題にもあるように専修念仏の開祖法然の弟子である親鸞の行実、とりわけ結婚に関するもので、法然の信者・外護者であり当時の政界の実力者であった月輪関白九条兼実（本書の中では「月ノ輪ノ法皇」と表現されている）の娘「玉日」と親鸞が結婚するに至る顛末を記している。

兼実は、法然のような清僧の念仏と自分のような在家人の念仏に差別が無いというならば、法然の弟子で「一生不犯」の僧を賜り自分の娘と結婚させたいと法然に迫る。それに対して法然は善信房（親鸞）を指名するが、親鸞は今まで保った禁戒を破ることは出来ないと難色を示す。法然は、親鸞が法然の弟子となるきっかけとなった六角堂の救世菩薩の示現の文「行者宿報説女犯、我成玉女身被犯、一生之間能荘厳、臨終引導生極楽」に任せて「落堕」（結婚）せよと親鸞に促す。親鸞は、今まで秘密にしていた示現の文を法然が一字一句知っていたことに驚愕して決意し、「法皇第七ノ姫宮玉日ノ宮」と結婚した。法然はその玉日を見

て「子細ナキ坊守ナリ」と褒めたという。現在に至るまで真宗道場主の妻は「坊守」と呼ばれており、本書は「坊守」呼称の縁起譚ともなっている。

このような本書の内容は「史実」に照らしてどうだろうか。先ず親鸞自体が当時の貴族の日記類等の客観的資料に全く言及されず、明治期には一時その実在すら疑われたことからも判断されるように、親鸞と兼実娘「玉日」の結婚を実証するような資料は今のところ報告されていない。そもそも「玉日」の存在もそれを証するものは何も無いし、関白九条兼実を「法皇」と呼ぶことは、記述者の認識の程度を疑うに十分である。南北朝期に原型の編纂がされたという『尊卑分脈』には玉日の記載があるが、研究者はこれを後世の竄入とみなしている。

かような次第で、現在では兼実娘「玉日」と親鸞の結婚譚は「史実」とは考えられていないが、ここに一つの面白い事実がある。先に述べたような明治期の「親鸞非実在説」に刺激された形で、それまで真宗各本山の秘庫に眠っていた親鸞自筆を含む多数の資料が紹介・公開され、親鸞の思想や行実に関する研究は飛躍的に進展したのであるが、その中で真宗高田派本山専修寺に伝来する親鸞の子慈信房善鸞宛親鸞消息（所謂「善鸞義絶状」）は興味深い文言を有している（日本古典文学大系八二、一八三頁参照）。その中で親鸞は、善鸞が一般に親鸞の妻として考えられている恵信尼のことを「継母の尼」と表現したことに言及している。このことから、善鸞は恵信尼の実子ではなかったこと、そして親鸞には現在一般に親鸞の妻として知られる恵信尼以外にも妻が存在したらしいことが読みとれるのである。

ただし、その恵信尼以外の親鸞の妻について、それ以上の事は全く何も明らかになっておらず、勿論これを兼実娘「玉日」に結びつける徴証は何も無い。『親鸞聖人御因縁』に記す兼実娘との結婚譚は、親鸞の出自を高めるために創作された説話とおぼしいのである。

しからば、何時、何処で、誰がこうした説話を創作したのか。この『御因縁』について先駆的な研究を行った宮崎圓遵氏は、様々な徴証を検討して、『御因縁』が初期真宗門徒の一流である荒木門徒の手により成ったもので、その成立は、親鸞の曾孫覚如による本格的な親鸞伝記である永仁三年（一二九五）成立の『親鸞聖人伝絵』よりも更に先行するものであろうと述べられている（同氏著作集第七巻参照）。つまり親鸞没後半世紀を経ていない関東において『御因縁』のような「親鸞伝説」が形成されていたというのである。

宮崎氏は『御因縁』の伝本について、「室町中期」とする写本を数点紹介されているが、今回拝見した恵照寺本も

そうした写本に類する一本ということになろう。テキストとしては同氏が全文を掲載している摂津小浜毫摂寺本とほぼ同一である。

二

親鸞に関する史実や説話を豊富に胚胎し、門弟も多数活動する親鸞滞在の地関東をしばしば訪れ、それらを貪欲に吸収し自らの立場から取捨選択を加えて新たな親鸞伝を編纂したのが、前述の親鸞曾孫覚如である。

親鸞の墓所に由来する本願寺の地位向上に奔走していた覚如は前記恵信尼の直系であり、その編纂する『伝絵』では「玉日」も含めて恵信尼以外の妻の存在について言及されることはない。

彼の言説はその立場上所謂「本願寺中心史観」となることはやむを得ないが、学識豊かで文芸的な才能を有する覚如の手になる『伝絵』は、本願寺教団の教線の拡大にも伴って、他流の伝を圧倒して親鸞伝の「定本」たる地位を獲得し、東西本願寺及びその門流においては、親鸞の忌日報恩講の期間に、この『伝絵』に基づく絵伝を掛けて、そのテキストを奉読することが広く行われてきた。

『親鸞聖人伝絵』は、覚如による文字テキストである「伝」とそれに基づいて描かれた「絵」が一体となった絵巻物であったが、現在一般的に見られる形態は、文字テキストだけの冊子本と絵だけの掛幅絵伝（四幅が標準）であり、前記報恩講においては、絵伝を掛けて、その前で伝を奉読するのである。よってこの絵伝は一寺に一組はあるというぐらいに広く流布しているが、その各幅各段の個々の図像について詳細に説明したのが、今回報告するもう一つの典籍である。

恵照寺蔵『御絵伝詳解』写本一冊、縦二六・一糎、横一七・六糎、料紙は楮紙で全二十三丁、奥書には「文政十二己丑之歳初冬上澣第一日書於自坊北基之軒、碧水比丘若瀛湛寧記」とあり、文政十二年（一八二九）若瀛により書写されたものであることがわかる。

各段について、絵伝の画面構成をそのまま図絵し、そこに描かれている一々の事物の名称を記すと共に、教学的意味合いまでも詳細に傍記しており、絵伝の「図解」として誠に興味深い。一例として、先の『御因縁』で記された「六角堂夢想」の段の図様を見ると、数ある親鸞絵伝の中でも、康永二年（一三四三）に七十四歳の覚如が改訂の手を加えた『伝絵』に由来し、その後の本願寺系親鸞絵伝の定型となった「康永本」系統の絵伝の図像と、ほぼ一致していることがわかる（日本の美術四一五「絵巻親鸞聖人絵伝」参

照)。

康永本では堂内の本尊に向かって左側に三人の人物が横になり眠っているように描かれているが、この三人について『御絵伝詳解』は上から「円照・法然・善信」と記している(円照は九条兼実の出家名)。ところが、覚如の『伝絵』のテキストでは、この段に円照や法然は登場せず、あくまでも善信(親鸞)一人が参籠しているように記されている。つまり、『詳解』の図像解釈は『伝絵』のテキストだけでは説明がつかず、『伝絵』以外の資料を援用していることがわかるのであるが、この段の場合は、前述のごとく、秘密にしていた救世菩薩の示現文を法然が知っていたという記事を含む『御因縁』のごときテキストを踏まえた上での解釈であろうと考えられる。

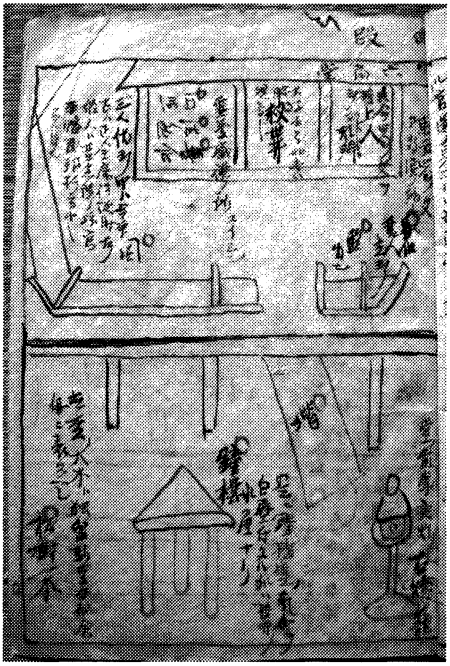
親鸞絵伝の図像解釈の世界においては、定本化した本願寺覚如の『伝絵』が他の親鸞伝の伝承を一掃したという訳ではなく、『御因縁』に代表されるような、いわば「非公認」の伝承も脈々と生き続けていることがわかるのである。

中世の真宗教団は、親鸞の絵伝のみならず、法然の生涯を描く『拾遺古徳伝』、聖徳太子の生涯を描く『聖徳太子絵伝』、信濃善光寺の縁起を描く『善光寺如来絵伝』など多数の絵伝類を精力的に制作して、絵解きなどの布教に利用しており、室町期以降の本願寺蓮如の「御文章」(所謂「おふみ」)や掛幅の「名号」軸等と共に、ちょうど現代のメディア戦略に相当するような分野で当時の最先端を行き、それが教線の爆発的拡大に繋がっているようにも見受けられる。

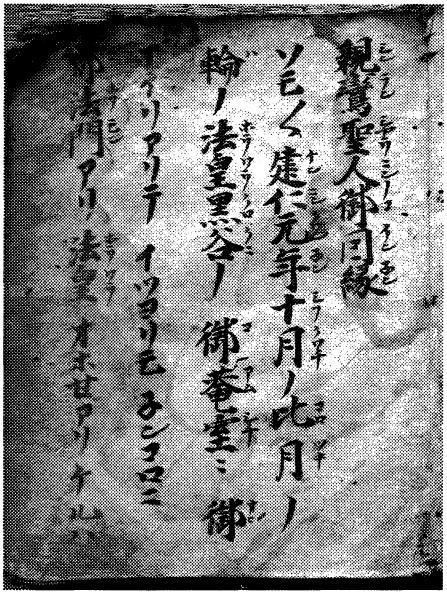
『国書総目録』には『御絵伝詳解』と全同する書名の典籍は記載されていないが、それに類する書名は写本・版本とも少なからず収録されており、恵照寺蔵『詳解』の内容を検討するには、それらとの比較作業が必要であろう。

ともあれ、朱を交えた細字で詳細な説明の書き込まれた恵照寺蔵『御絵伝詳解』は、絵伝の図像解読に精力を傾注した書写者である同寺若瀛師の、祖師親鸞の行実に対する飽くなき探求心の発露であり、絵伝類の研究と鑑賞、そして拝観と賛嘆には、図像の精密な解読が不可欠であることを現代の我々に訴えかけているように思われる。

最後に、貴重な蔵書の調査閲覧を御快諾賜りました恵照寺御住職、調査への同行を許され御便宜をお計りいただいた熊本県立大学日本語日本文学研究室、恵照寺蔵書調査の先鞭をつけられ幅広く御教示いただいた美里町文化財保護委員、長井勲氏に厚く御礼申し上げます。

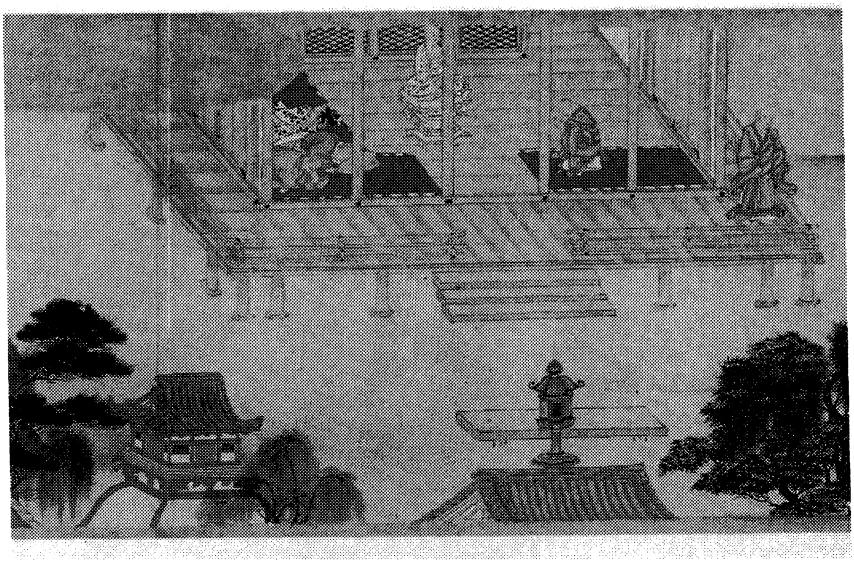


②御伝絵詳解 (六角堂参籠段)



親鸞聖人御因縁
ソモ〳〵建仁元年十月ノ比月ノ
輪ノ法皇黒谷ノ御奉室ニ御
アリテ イワヤリモ ムシロニ
御法門アリ法皇オボセワリ ケル

①御因縁冒頭部



③康永本絵伝（六角堂参籠段）